



臥 薪 嘗 胆

立川総合病院 呼吸器外科

岸 本 晃 司

受験勉強からようやく解放されて医学部へ入学し、親元から遠く離れた地で自由な大学生活を謳歌していたある日のことである。大学から連絡があった。“入学試験の採点ミスが見つかり、実は君は不合格であった。入学は取り消す。”突然の通告であった。これからまた受験勉強をしなくてはならないのかと思うと、とてつもない恐怖と不安に襲われた。もう一度あの頃のように勉強ができる自信はなかった。私は高校で落ちこぼれたため苛酷な浪人生活を余儀なくされたからである。医学部に合格したのは当時の高校関係者の間では奇跡が起きたとまで言われていた。

中学までの成績はそこそこであり、落ちこぼれなんて全く別世界の話であった。が、地域（田舎）の秀才が集まる地元の高校のクラスに入学してから状況は一変した。早くも1年の1学期の時点で勉強について行けなくなってしまったのである。英・数といった主要教科は100点満点中、軒並み20-30点台という、今まで目にすることがないような点数しか取れなくなった。そんな1年生の1学期終了後の最初の保護者面談でのことである。その席で母は担任から“息子さんはここには来るべきではなかった”と突き放されてしまった。それ以来、親は二度と保護者面談に来ることはなかった。私も、親が惨めな思いをするのが可哀想だったので、寧ろ来ないことでほっとしていた。勉強をする気はあったのだが、やり方がわからず、これを模索する日々を過ごしていた。決して遊び呆けていたわけではない。音楽の成績はとても良かったが、勉学中心というカリキュラム上、2年生から音楽の授業は無くなってしまった。部活もやっていなかったのも、何の取り柄もない、ただの落ちこぼれ生徒として高校生活が無為に過ごし

ていた。

小学校の時から医学部志望を掲げていたのだが、高校の成績が一向に上がらない私を見て母は息子の能力の限界を悟り、“もう医学部を目指すのはやめたら？”と言ってくれるようになっていた。“お前は医者になれ、医者になるんだ”と両親揃って私が幼い頃からずっと言い続けてきたのに、である。この親の頑なな意向のお陰で私はすっかり洗脳されてしまい、もう小学校の高学年の頃には将来の職業は医者以外に考えられなくなってしまっていた。ちなみに両親ともに最終学歴は高卒で、仕事も医療とは全く関係のない職業であった。幼児期は消防士に、小学校低学年の頃には自衛官になりたいと言っていた記憶があるが、医者以外の職業を口にしたのはこの頃が最後だと思う。小学校2年の時、“将来は医者になりたい”と言っている友人を見て、“変わったやつもいるものだ”と思ったが、この頃までは自分の将来に対する柔軟性を保っていたのだと思う。漫画が禁止されていた我が家でただ1冊だけ購入が許された“ブラックジャック”が小学校高学年の頃の愛読書で、将来の職業を外科医と定めたのはこの頃であった。

高校での成績はクラスでビリから2番目というのが定位置であった。下には下がいたのである。だが、そのビリの彼はバンドのボーカルをやっていて、学園祭のスターであった。私のような日陰を歩いているような高校生活ではなかったようだ。私が少々良い点数を取ってもビリから2番目という定位置は覆ることはなかった。すなわち、私とその学園祭のスターは、クラスの中では飛び抜けて成績が悪かったことになる。このため私と（恐らく）彼は、担任からは全く無視される存在

であった。通知表の担任のコメント欄もずっと空白のままであった。私はこの高校時代の経験のお陰で落ちこぼれ生徒の気持ちがよくわかる。

それでも、高校3年の頃によく勉強方法がわかり始め、独学で高校1年の勉強からやり直して行った。教室の一番後の席に陣取り、授業には参加せず（できず）参考書をコツコツと勉強して行った。その甲斐あってか当時の共通一次試験では、2次試験でギリギリ逆転可能なラインの点数が取れた。しかし、最後の担任との面談でのことである。医学部志望だと得意満面で告げたところ、“お前は4浪か5浪しても絶対に国公立の医学部には入れない”と罵倒されてしまった。最後まで屈辱を味わった。当時、医学部志望であれば共通一次試験の数学は満点を取るのが普通とされていたところ6割しか取れていなかったのも、担任のこの見立てはまあ無理もなかった。この担任の忠告はあっさり無視して信州大学医学部を受験したが、“信濃路は雪深し”という少し趣のある電報であっさり入学を拒否された。

1年浪人すれば何とかなるだろうという呑気な気分で予備校の試験を受けることにした。京都での生活に憧れ駿台京都校を受けた。第6志望までクラスを希望できたのだが、何と、全て不合格となってしまった。駿台は格が違うのだと悟り、河合塾広島校の医進クラスを受験した。が、何とこれも落ちてしまった。流石にこれでは医学部には入れないと思い、もう一度受験したところようやく合格できた。その医進クラスの一同が教室に集合した初回のホームルームでのことである。塾生番号は入塾試験の成績順で、ホームルームの時の座席はこの番号順、すなわち成績順であった。私は120人中の80番台であった。最後の方ではなかったので少し安心していた。がしかしである、担任は教室の前から後ろに向かって歩きながら、“ここまでは普通に勉強すれば受かる”と言ったのが30番まで、“ここまでは一生懸命勉強すれば受か

る”と言ったのが50番まで、それで話は終わった。つまり、80番台の自分は1浪ではまず受からないとの無言の宣告であった。流石にこれで私は目を覚ました。それまでの甘い楽天的な考えは一切捨てて心を入れ替え、真剣に勉強をすることを心に誓った。塾の目の前にあった寮に入り、寝る時間と食事・入浴の時間、わずかな休憩時間、そして週1回の半日の息抜き街ブラ以外のほとんどを勉強時間に費やした。何年浪人しても絶対に医学部に合格できないと言われた悔しさをバネにして“必ず見返してやる”と燃えていた。授業も寮生という地の利を生かし、早朝塾が開錠されると同時に教室の前から3番目の座席を確保した。最初に並ばされた時の、あの30番以内の席である。塾の素晴らしい講義とテキスト、そして猛勉強の甲斐あってか成績は急上昇し、結果1浪で長崎大学に合格することができた。長崎大学は模試ではずっと良い判定をもらっていて、共通1次試験でも余裕のある点数を確保できていた。落ちるはずはないと信じてここに願書を提出した。ただ、合格発表前は、勉強を続けるのにもう限界を感じていたため、落ちたら潔く諦めるつもりでいた。2浪はせずにどこかの高名な画家に弟子入りして、勉強とは無縁の芸術の道に進もうと本気で考えていた。それくらいの思いをしてやっと入った大学だったのである。

この“入学取り消し”の顛末は、大学入学後から医者になってからも、長岡に来てからも繰り返し現れる悪夢である。毎回のパターンも同じで、入学取り消しの知らせにひどく落胆して今後を模索しあがいているところで目が覚める。かなりリアルな夢なので、目が覚めてしばらくしてからようやくそれが夢であったことに気付き、深く安堵する。そして、入学を許可してくれた母校に感謝をするとともに、今、こうして子供の頃からの憧れであり目標であった外科医をしていることの幸福感に浸るのである。